

# 季刊 連句 第44号



## 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に  
必須の知識をすべて網羅！  
初心者から研究者まで使え  
る本邦初の連句辞典

版  
B6判  
三五二頁  
三五〇〇円

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三三四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

### 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越  
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字  
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木  
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋  
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山  
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

## 俳句鑑賞辞典

水原秋桜子編 二三〇〇円  
貞徳・宗因から現在活躍中の俳人  
まで二七〇人の古典的かつ伝統的  
な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実  
作の経験を生かし句作にも役立つ

## 現代俳句鑑賞辞典

水原秋桜子編 二八〇〇円  
結社や傾向にとらわれず現代の代  
表的な俳人五〇五人の代表作一四  
六八句を収め、公平に客観的に鑑  
賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

## 季語辞典

大後美保編 二八〇〇円  
日本の季節にまつわる言葉をスモ  
ック・不快指数などまで収録し、  
春夏秋冬の四季に分類した。気象  
学者の立場から厳密に季節を分類

## 難解季語辞典

中村俊定監修 四五〇〇円  
古典俳句に使われる季語は今日で  
は意味や表記が難解で正しい解釈  
や鑑賞ができない。本書はそれら  
の季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 国語学会編  
A 1800円

国語慣用句大辞典 白石大二編  
A 5700円

国語慣用句辞典 白石大二編  
B 1100円

国語史辞典 林巨樹他編  
B 6100円

日本語語源辞典 堀井幸以知編  
B 6100円

京都語辞典 井之口・堀井編  
B 1800円

擬音語擬態語辞典 天沼軍編  
B 3500円

隠語辞典 藤澤実編  
B 3800円

近世上方語辞典 前田勇編  
A 5100円

花柳風俗語辞典 堀井幸以知編  
B 3300円

明治新語俗語辞典 堀井幸以知編  
B 3300円

難訓辞典 中山繁雄編  
B 3300円

名乗辞典 荒木典雄編  
B 2800円

名数数詞辞典 森・藤澤編  
B 5500円

あいさつ語辞典 奥山益朗編  
B 1800円

新版 ことば遊び辞典 鈴木繁三編  
B 5800円

類語辞典 鈴木・松田編  
B 2100円

類義語辞典 徳川・富田編  
B 2300円

表現類語辞典 藤原亨一他編  
B 4800円

新版 文章表現辞典 神島・村松編  
B 2900円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7 電話03-3233-3741-2

膝痛綺譚 (南柏雜記 42) .....	1
新形式「源心」の提唱 .....	東 明雅 ... 2
パソ通連句見聞録 .....	海野海砂 ... 4
平成五年度の連句界 .....	東 明雅 ... 8
歳旦三つ物 .....	10
第四十八回猫叢会 .....	16
歌仙八巻 捌 東 明雅 内田麻子 上月淳子 雑賀 遊 瀧川雅代 豊田好敏 八角澄子 仏淵健悟	
「馬追」付勝練習二十韻 .....	24
うらら会 .....	26
源心四巻 捌 東 明雅 式田和子 杉江杉亭 豊田好敏	
柏連句会 .....	28
二十韻三巻 捌 下鉢清子 五十嵐讓介 中田あかり	
近刊紹介 .....	9
雁帛往来 .....	29

表紙 (翡翠) 宮崎龍火子

膝痛綺譚  
南柏雜記 42  
雅

われわれは今まさに本格的な老齡社会に突入している。そのことを私が痛感するのは、毎年行なう正式俳諧の役決めの時である。「私は膝が痛いので、正座できませんから」「どうも、永く坐っておれませんので」と言って役を辞退される方が十人に三人はある。

何を隠そう、私も実は膝が痛かった。それは二年ほど前ある朝、寢床の中で膝を曲げようとしたが、それが突然曲がらず、激しい痛みを覚え愕然とした。何かのはずみだろうと軽く考えていたが、その後、痛みは益々募り、遂に近所の整形外科にかけ込んだ。レントゲン検査のあと、「あなたの膝は永年つかって関節がすりへっています。これは治りません。一層悪くならぬよう注意して下さい」と言われた。

一方、私の棲んでいる猫叢庵も、引越してから十二年、一度も畳替えしなかった。何か床がぶくぶくして、根太が落ちるような危険を感じるようになった。それで懇意の大工さんに見て貰ったら、思い切った、書斎と居間の根太を取りかえる大工事になってしまい、その間、私は二階の寢室で坐って仕事をする生活が続いた。永い間、椅子に腰かけて膝を伸ばして仕事をしていたのに、膝を曲げての

仕事はすぐ痛くなって最初は参ってしまった。ただ、その時、私のお尻の下には、名前は何と申すか正確には知らないが、俗に正座椅子と呼ばれるものが入っていたのである。この椅子を使うと、体重が直接曲げた両足にかからないので、痛みが随分軽減される。工事は二十日間続いたので、その間、私は辛抱しながら正座して仕事を続けたのであった。そして、遂に工事完成の日が来た。畳を取り払い、頑丈なフローリングを張った書斎は生き返ったように見えた。何より嬉しかったのは、松本で使った当地へ運んで来た幅一間半、高さ一間半の大書棚、これは畳の上では立てられないので、これまで上の部分と下の部分が分かれていたのが、十二年ぶりに昔のように一つになって、西側の壁に聳え立ったことであつた。そして、その夜のこと、ベッドに入つた私は何気なく脚を伸ばして、何の痛みもないことに気がついて驚いた。夢ではないか。そつと曲げ、また伸ばしてみる。不思議である。痛くない。私の膝は治つたのだ。こう気がついて私は呆然となつた。

右の話は全く嘘偽りのないマジである。工事のためしばらく正座して膝を曲げ続けたのが、逆によい効果となつて、膝が痛みなく屈伸できるようになつたのである。ところが、きつと私のように正座しなかつた為、膝が痛くなつた方が世の中には大勢いらっしゃると思うので、世のため人のため、ささやかな体験談を申し上げる次第である。

# 新形式「源心」の提唱

東 明 雅

私が新しい連句形式として「二十韻」を考え、発表したのは昭和五十九年十二月のことであった。それから約十年、二十韻は忙しい現代生活にマッチした新しい形式として、多くの人に愛用され、ことに猫蓑では、たっぷり時間のある時は歌仙、二、三時間で首尾したい時は二十韻と、自ら使い分けるようになって、既に数々の名作も生まれ、いわば連句の世界にすっかり根をおろした格好になっている。ただ、人間は贅沢なものだから、歌仙をやるだけの時間はないけれども、二十韻ではどうも物足りないという、具体的には、歌仙は四時間以上かかるけれども、二十韻は二、三時間で終る。その中間、三時間以上、四時間以内の時間的余裕を十分堪能できる形式が欲しいというのも当然のことであろう。

そこで今回、考えたのが源心という二十八句のあとに示すような新形式である。もともと、私の歌仙四時間説は季刊連句第三号に述べている通り、表六句に三十分、裏十二句に一時間半、名残の表も一時間半、そして、名残の裏に三十分、計四時間であったし、二十韻はこれも季刊連句第八号に述べているが表四句は二十分、裏六句は一時間、名残の表一時間、名残の

裏二十分、計二時間四十分の計算である。もちろん、この数は目標とし、理想とするもので、現実では必ずしもこの通りには参らぬであろうが、大体の目安としては妥当なものである。

その計算で、源心を考えると、この二十八句、表四句は二十分、裏十句は一時間半、名残の表十句も一時間半、そして名残の裏四句は二十分、計三時間四十分であり、三時間以上、四時間以内の時間的余裕があれば、ますます可能な形式であると言えよう。

考えてみれば二十八という数は、三十六（歌仙）と二十（二十韻）の丁度、真中の数である。昔から二十八宿という形式があつて、それは表六（五句目月）・裏八句（七句目花）・名残の表八句（七句目月）・名残の裏六句（五句目花）であるから、源心はこの二十八宿の一変形とも考えられるところである。

しかしながら、私が思うに、連句一巻のおもしろさは序・破・急とある中の破の段で、序（表）と急（名残の裏）はともに必要ではあるけれども、それほど凝ったものを出す必要はない。それよりも、破一段（裏）と破二段（名残の表）に十分な句数と時間を割いた方がよいというのが、二

十八宿から、敢て源心を考えたと根拠である。

因みに源心というこの名稱は、この形式をはじめて披露したのが、平成五年十一月二十四日、江戸川区行船公園の中の源心庵であつたことに由来する。この会では一座二十人、四卓に分けて、この新形式で興行したが、突然はじめての形式にもかかわらず、捌きも連衆も、何の惑いもなく、十一時から昼食を含め、四時前後にはめでたく首尾したのであつた。次にかかげるのは当日の私の作品である。

## 冬紅葉

潮入の池の波紋や冬紅葉  
 四温日和に集ふ連衆  
 クリームを角の立つまで泡立てて  
 画集の届く午后の宅配  
 半月の兎は何処と子の問へる  
 踊終つて辿る野の路  
 新走り酔ひし脳裡に人の顔  
 教へてくれぬ電話番号  
 蚤の市アンティークジュエリーじゃらじゃらと  
 サンピエトロは鳩の遊び場  
 日雇の男に夜は明け易く  
 六神丸のほろ苦き味  
 踏みこみの畳のへりに花散りて  
 庵主ひっそりかけるふの中  
 くり返しテープで習ふ茶摘歌

## 明雅 捌

孝子 美津 遊 和代 庸子 明雅 孝 庸 津 遊 代 孝 遊 津 庸 孝 明雅 庸子 和代 遊 美津 孝子

研修旅行サロンバスにて

雪しまく妙義山容黒々と  
 菟蒻農家かさむ借財  
 路は支店長より本店へ  
 ちよつとお尻を触る上役  
 羅に抱く命のあえかにて  
 門を閉ざして籠る世阿弥忌  
 日本海月に漂ふ漁り舟  
 稲架の形の変る峽ごと  
 やうやくにメビウスの輪を抜け出して  
 デル・デス・デム・デン覚えうららか  
 花盛り空より笑ふ鬼瓦  
 風船売りの道に一服

平成五年十一月二十四日  
 於 源心庵 首尾

孝 津 孝 遊 庸 遊 代 孝 津 遊 庸 孝 明雅 庸子 和代 遊 美津 孝子

名残の折	初折		源心
	裏	表	(二十八句)
裏	裏	表	(二花二月)
	十句	折立 月	
表	裏	九句目 花	
	十句	九句目 月	
裏	裏	三句目 花	
	四句		

五・六年前、O・A（オフィスオートメーション）化の波に周章でふためくオジサンたちの姿をTVでご覧になったことがありますか。退社後のコンピュータ・スクールで、困惑と疲労のため朦朧とした表情の中高年の人達を、同じ境遇の者としては涙無くして見ることはできませんでした。

その五・六年前のこと、ナード（コンピュータおたく）と呼ばれるマニアックな人たちが、人恋しい高校生の弄玩的メディアだったパソコン通信が、やはりTVで紹介されました。自閉的な若者の風俗としてやや疑問の体で扱われていましたが、幼児の喃語のごときやりとりを見てなんてこったと思ったものでした。

この小文も、通常のパソコン通信で普通に用いられる文体に倣っています。親しみを表出するために記号文字を組み合わせたニコニコマークやら泣き笑いマークなどを挿入しますが、いい年をして恥ずかしいので筆者はそれをやりません。

ビートたけし氏の毒舌の餌食になったりする、そのパソコン通信が、ようやく一般的な情報源に育ちつつあります。銀行や図書館などのオンラインシステムが汎用化されたものと言えは想像して頂けるでしょうか。「パソコン通信・アクセス・ラム・ロム」などの用語が広辞苑の第四版から

見出し語として収録されていることからみても、もはや玩具の域を脱したとみてよいでしょう。

新聞雑誌TVなどに次ぐ第四のマスメディアと呼ばれるには未だ蓄積が乏しくて、道は遠いけれど、先行メディアとははつきりと異なる性格があって、それは編集者の意図する加工をほどこした二次情報ではなく、未加工の一次情報だから、より真実に迫る機会が多いだろうと期待される場所です。

ニュース性は他へ譲るとしても、データ・バンクとして、さまざまな分野の情報が整備されてゆけば、法令集、判例集、百科事典などの大部冊の書籍で高い家賃の事務所を埋め尽くすことはなくなるだろうし、文書の山は塩煎餅ぐらいのC・Dに収まってしまふ。音声や画像が加わるマルチメディアが目前ですから、異性のリストから相性のよい伴侶を選ぶなんて事もできそう、関係ない身の上ながら欣快にたえません。

メーカー系、新聞社系の大ネットワークから町の手づくりネットまで大小二百を超えるネット局があって加入者数二百万人だそう。重複を除いてもざっと百万人が電話線を使っているわけ、そのメニューは科学・医療・福祉・教育・技術などの専門情報から、文学・絵画・音楽、果てはグルメ・占い・競馬

予想まで多岐にわたり、その一つに連句も常設されています。

連句のメニューが大ネットワークに限らず小ネットワークにも広がったのは、ここが肝心のところですが、新聞雑誌TVが一方、向メディアなのに対し、パソコン通信が同時相互方向メディアであることで、この特性が連句には逃えたようにびつたりなためです。将来にわたって連句人を増やし続けるにちがひありません。

好きな時に読みに行ったり、書きに行ったりするほかに、申し合わせて進入し一部屋を占領してやりとりをすることもできます。企業が支店網を招集して会議をするのに適した装置ですが、これなら運座と異なるところはなく、即興の付け合いを野次や罵声とともに応酬する趣は楽しいものです。

ただしこれは別途料金がかかりますので電話料ともに三時間の費用はおよそ四千円ほどになり、いつでもというわけにはいきません。

そこまでやらなくとも通常の通信（公開通信、ボードと呼びます）で、文音と運座の間ぐらゐの感興はあるもので、ことに投句に添えて発信される雑談に対して、取り巻く座談の名手たちが寄ってたかかって盛り上げるおもしろさは大へんな魅力です。

と、ここまでは良いことづくめですが、連句の質の向上となると疑問の点もあります。ナアニ、層が厚くなれば自然に質も向上するさ、と弁証法的に樂觀することもできませんが、東明雅先生のご心配（第四一号以下）を拡大するこ

とがなければよいが、といたいいけな胸をいためています。

お察しのとおり行きずりの者同士で連句を巻くのだから師弟関係が生まれるわけではなし、方向を定めて指導し指導されるという状態にはなりません。ことさらに対等であることを求める気風が強いから、さまざまな主張を併呑しながら進んでゆくの悪くすれば外道、良くても横這いのままに終始するかも知れないと、杞の国の人は憂うるのであります。

筆者が出入りを許されているのは、PCIVANとBNetの二つにすぎないから、パソコン連句の状況は、と言って概括するわけにもいきませんが、見聞きした範囲で記してみましよう。

加入者六十五万人のPCIVANの場合は、『電脳連句で遊ぶ』の著者林義雄・辻アンナの両氏や仏淵健悟氏らについて、これら猫養流の申し子たちが蕉風俳諧を志していますから、テクストに厳格な気風をもっています。どのように展開するとしても基礎の学習は押さえておこう、という考え方のようで、ここは大いに賛意を表しておきたいところです。

工夫の要る点は、いわば通りすがりの人を「面白いよ」と言って引き込むわけだから、つまり志をもってやって来るとは限らないから、困難な式目の学習をさあやれとどやしつけるわけにはいかず、さりとしてそこを通らねば話にならないところです。

そこで、わかばマークの人に用意したのが「自由連句」

と称する、あらゆる約束を取っ払った百韻で、

酒提げて師を問ふ弟子ぞ有難き

見たうもないはケーキに饅頭

いやしかし饅頭恐いの例もある

酒饅頭なら文句あるまい

坊 海 奈 阿

このおらかな応酬ぶりですから警戒心もあらばこそ飛んで火に入るなんとやらとなります。そして次ぎなるステージは、ゆるやかな式目による、賦物連句でステップアップします。人気の高い賦物には次のようなものがあります。 (二条良基氏は句柄が悪くなると言って賦物に反対していますけど)

回文二十韻

疎いけど老母過ごす時は時計塔

春風のもと友の背借るは

今朝皆は田楽囃んで花見酒

五音折句二十韻

秋めくや贅掃き終へて美しき

ゑのころ草の躍る風道

初月夜久方ぶりの舟宿に

瓢箪なまづ帮間の世辞

物名花二十韻

父曰「山鶉鳴けばめでたし」と

(白山石楠花)

酒いとうまく酔ひてさうらふ

唄声す見れば鬼ども月見宴

悟 幽 海

海

辺 (アイウ)

海 (エオ)

悟 (ハヒフ)

筆 (ヘホ)

辺

ぼ (鶏頭)

奈 (董)

このような言語遊びを楽しみながら初歩の式目に馴染んでゆくと、常設されている歌仙の席で、捌きと連衆が時代めいた用語でやりとりしている式目論議や、文語文法や、歴史的仮名遣いや、古俳諧の評釈やら、ときには母音調和などと言語学のレクチュアやらが自ずから身についてくる。(筈です。と言うのは長年自由連句ばかりという意志堅固な人もいるから。)

このようにして連句の柵にはまりこんでゆく人が後を断ちません。PCIVANの連句は盛況と言って良いでしょう。一方、閉鎖的なサロンと化してしまい、通信が涸れてしまいうケースもあります。

BI NETは五十人ほどの小じんまりしたネット局ですが、ここは若い作家や編集者が集まって、新刊書の書評や、詩の評論をすることが中心テーマです。

数年前には作品集「祈念祭」を出すほどにパソ通連句が盛んでした。作風は、表現者の意地のようなのが漲っていて独立した一句としては目を見張るものがあります。一巻の構成のうえで制御不能に陥っている様子があります。底力のある集団ですから構成上の指揮が強化されれば優れた一座となることでしょう。

すぐれて時めきたまいしが、盛んにすぎてその果ては、パソ通連句にあきたらず、と七五調になることもありませんが、連句は一座してやるに限るとばかり、即興感の連座に魅入られてしまいました。そうなるとう働盛りの年齢

層ですからそうたびたび集まることもならず年に二三巻という地味な活動で、オンラインのほうはすっかり涸れてしまいました。このあたりにパソ通連句の限界があるのかなあと感じます。

切磋琢磨して向上するためには忌憚のない応酬がなければなりません、それには難しい点があります。パソ通では、不用意な言辞が感情を逆撫でしたとき、刺さった刺を抜いて修復することが極めて困難です。顔や肉声を知らないうというところが、これほど多く人間関係を損なうものかと驚くばかりです。そこを乗り越えなければなりません、ついで腰が引けてしまいます。論議と人格は別と言っても、プロ同士ならともかく市井の人間同士では言って良いことと悪いことがありますから。このような事情があって、パソ通連句の中核となる役割はPCIVANの自由連句に見られるように初心者のオリエンテーションにこそあるのではないかと思われまます。そこで展開する付け合いがいかにか稚拙であっても座の文芸の面白さを伝える限り文芸上の誇りある役割となるでしょう。徒に功を争って私闘の場にしたあげく、ボードが涸れてしまっってはどうにもなりません。あなたも、詩人の書を詩人が読み詩人が評して、詩をサロン化し、大衆から詩を収奪した前車の覆轍のごときを、頂門の一針とすることでしょう。(と、やたら難しい言葉を並べる)

なによりも若年層の参加が望まれるわけですから、BI NETのような若い人に人気のあるボードで連句が涸れるのは残念の極みです。復活を切に願っています。

もうひとつパソ通連句の可能性について夢があります。百万人規模のメディアですから相互乗り入れをして全国ネットとなり、そこで付け合いをやることです。これを小規模ながら実験をした作品があります。

魚 (中日)  
魚 (道新)  
雲仙や長き眠りの覚めつらん  
三日月細き入梅の空

未知の人の付け合いなので、やたら気取っているところが可笑しくもありますが、この試みには大変に感銘を受けました。このことを敷衍すれば、海外の人達との付け合いもできるわけで、そのことは、カナダに赴任したPCIVANのメンバーとの交信で実験済みです。オクタビオ・パスは裸で人中を行くように恥ずかしかったと言っていますが、パソ通連句なら姿は見えませんが恥じらいを越えて連句に馴染んでくれるのではないのでしょうかね。

大きければ良いかと言えば、オデキと食い物屋は大きくなるとツブれると言いますが、連句もそうならなければ良いが、と一方では危惧されます。つまり教条的な守旧派から破壊的な前衛派までが入り乱れるわけで、制限や禁止ばかりに拘って前進しなかったり、前衛の美名のもと暴走したりしかねないところがあって、それは指導者が睨みを利かせる結社連句とは異なるところです。

後世への罪人となるか、賜物となるか、パソ通連句もまた、新しい連句への模索が始まっています。

平成五年の連句界

東 明 雅

平成五年の連句界は前年に倍増して賑やかであった。全国規模の行事が前年は五であったのに対して、当年は九を数え、出版物も夥しい数に上った。最も嬉しかったのは、連句人口の増加、それも地方、そして二十代・三十代の若い層の作家が増えて来たことである。この盛況をもたらした原因は幾つも考えられるだろうが、最大のものとしては、平成二年初めて連句が参加するようになった国民文化祭の影響であろう。この大会が全国を一めぐりした時、連句復興は本当に実現するのではあるまいか。兎に角、十年前からは想像も出来ないような盛況であった。例年の通り、その実状を項目別に列挙する。

一、行事

- ① 一月二十四日 現代連句シンポジウム、東京九段下のグランドパレスで開催。その実況と作品とは「俳句研究」四月号で発表された。
- ② 六月十三日 連句協会第十二回全国大会。北区赤羽会館ホール。
- ③ 七月二、三日 全国連句いなみ大会。富山県井波町総合文化センター。
- ④ 九月三、四日 全国連句新庄大会。山形県新庄市新

庄市民プラザ。

- ⑤ 九月十五日 連句を楽しむ会。京都法然院。
- ⑥ 十月十、十一日 第八回国民文化祭いわて93協賛全国連句大会。
- ⑦ 十月三十日 豊田連句恋々まつり。豊田産業文化センター。
- ⑧ 十月三十日 第二十一回俳諧時雨忌。飯田橋家の光会館。
- ⑨ 十一月二十五日 芭蕉翁三百回忌追善法要。大津義仲寺

二、出版物

- ① 磯直道・日笠靖子著「去年今年」。一月刊。両吟三十六巻。
- ② 東明雅編「猫養作品集Ⅲ」三月刊。平成四年度の猫養会作品八十六巻。
- ③ 岡本春人編「花下微笑」三月刊。歌仙・源氏行・世吉・居待・出花・百韻・十二調など計百巻。編者は刊行の日を待たず平成四年十月世界。監修の阿波野青畝も同年十二月逝去。青畝・春人師弟の作風を知るには

最高の書。

- ④ 別所貞紀子著「言葉」を手にした市井の女たち―三月刊。近世女性の俳諧を初めて研究した書。
- ⑤ 下房桃庵編「俳諧やみつくば」三月刊。千字文千句をはじめ百韻・歌仙など三十六巻。
- ⑥ 磯直道著「葉月会連句集」五月刊。歌仙二十五巻。
- ⑦ 磯直道著「鍋奉行」八月刊。歌仙二十六巻。
- ⑧ 赤田玖實子著「蕉風俳諧連歌」十一月刊。論文と作品、歌仙・百韻・十八行・十三仏行など計六十九巻。
- ⑨ 連句協会編「芭蕉翁三百回忌追善俳諧集」十一月刊。第十二回全国大会の作品二十三巻と、結社別追善作品七十三巻。
- ⑩ 鈴木漠編「虹彩帖」十一月刊。歌仙・半歌仙二十五巻。
- ⑪ 全国連句いなみ大会入選作品集。七月刊。歌仙八十八巻。
- ⑫ 全国連句新庄大会連句集。十一月刊。半歌仙・二十韻二百十三巻。
- ⑬ 「連句年鑑」・「連句協会々報」。平成五年版は十月刊。会報は隔月配布され、それぞれ連句界の行事・作品を報道。
- ⑭ 主要グループ発行誌。連句研究会「連句研究」は十月の二〇八号で終刊となった。「俳諧接心」は十二月で五四九号。「季刊連句」は四三三号である。新しく同人制連句誌「れぎおん」が四月創刊され、八月に第二

号、十一月に第三号を出した。主宰は窪田薫、新しい形式の作品を中心に、いろいろ実作上の問題を提起して気鋭の論文を収めている。「都心連句」は十一月、二一号を出した。

その他、俳誌「白燕」・「獅子吼」・「草菔」・「あした」・「かびれ」・「未来図」・「摩天樓」なども、それぞれ毎号、連句関連の作品・記事を掲載している。

さらに、既に述べたように総合俳誌「俳句研究」四月号に「詩人による公開連句」として、一月二十四日、現代連句シンポジウムで作られた半歌仙「初昔」の巻が掲載されたが、これには批判もある。

(季刊連句41・42・43)  
また、芭蕉没後三百年を記念して「国文学解釈と鑑賞」五月号には芭蕉の連句・七部集が取り上げられた。

三、消息

昭和五十六年の連句懇話会の創立者で、而後、連句協会々長を勤めて来た阿片飄郎は健康上の理由で勇退、大林柚平が新しい会長となった。また、大林柚平は抱虚庵七世であったが、庵号を弟・近刊紹介  
子の土屋実郎に譲り、その襲号披露の会が  
一、連句猫養作品集Ⅳ  
深川富岡八幡宮で行  
一、芦丈翁俳諧聞書  
なわれ、多数の人が  
いづれも三月前後出版の予定  
参列した。

歳旦三つ物

犬吠岬や波きらきらと船起し

ごまめ数の子直会の酒

未開紅白磁の壺に投げ入れて

古稀となる妻の抱きし紅破魔矢

北極越えて初便り来る

枕頭に句帳拵げて深睡り

初空や狺犬すくと立ちあがる

夢に波濤の宝船漕ぐ

三枚に乙女椿の葉を留めて

初雀大君の逃がす難かな

かがり手毬にこもる波音

おぼろ夜のナイル川岸權とりて

蓬萊の仙女は松が根を枕

波音聞きつつむすぶ初夢

レトリバー雪解けの道みちびきて

東明雅

三代の顔の揃ひし年始め

かはるがはるに鳴らすぼっぺん

春の虹湖より丘へのび行きて

聖名祭筒袖着たる亡命者

ハープ浮かべて福茶一服

囀りの峰より峰へ渡るらん

産土や古りし狺犬初詣

蝶飾り白き昼月

夢の橋渡れば花の霞むらん

梅が枝に、末吉、結ぶ初詣

歌留多の小町引目鉤鼻

恋猫の嬰泣く如く月の夜に

黄金のジパングなれや初景色

御慶の馬を並めて甲比丹

春暖炉執筆余話のきりもなし

青木琢也

岩井啓子

秋元和彦

内田麻子

秋元正江

梅田利子

浅賀淑代

大窪瑞枝

織田康子

波に描く黄金の道や初日の出

賀状の端に記す犬の名

連風に夫の笑顔のつらなりて

小野シズ

大島に白波立つや初景色

礼者の膝に甘え寄る犬

春苺一粒選りにもぐならん

加藤治子

元旦やけふのいのちに遭ふ不思議

育ち盛りの競ふお雑煮

雪積みぬ瓦礫に草に木々の芽に

加藤道子

戌の春六たび迎ふ誕生日

国中みんな祝ふ屠蘇酒

かぎろひの大波小波たはむれて

神谷安子

くにぶりを夫と共にす雑煮かな

年始の客の桐下駄の音

影おぼろ陶俑の鬘匂やかに

蒲原志げ子

松羽目に自づからなる淑気かな

椅子に置かれし白き手袋

もとほれり雀隠れを踏みしめて

雑賀遊

米谷貞子

小林千雪

河野玄磨  
無相  
玄磨

上月淳子

倉本路子

年立つや犬のタローと共白髪  
雪国の葉にほふ輪飾  
春の潮出港の銅鑼高らかに

坂本孝子

朱塗りの破魔矢をかざし巫女の舞ふ  
茅の輪ひときは日枝の御社  
三絃に耳傾ける犬のゐて

愛犬の綱新しや恵方道  
垣より洩るる弾初のチェロ  
たびら雪シェリー酒を酌む夫とゐて

下坂元子

むさし乃の空ほのぼのと初明り  
参道を行く破魔弓の鈴  
床の間にデージの鉢飾られて

真田光子

初凧や墨絵に紛ふ伊豆の山  
船起しする浜の人々  
犬連れて散歩する道のどらかに

杉江平朗

書初や我が名つくづく書きにくし  
宵の年には立ちし小波  
犬の仔のまことしやかに座りゐて

式田和子

吠え過ぎる犬もてあまし祝太郎  
大き顔して仲も正月  
波光る餘寒の涙を駈くるらん

杉山壽子

お正月富士くつきりと波の上  
磯風ゆらす船の輪飾り  
焙炉場家族総出で茶を揉みに

茂田キヨ子

たぎつ湯に聴く松籟や初点前  
勅題菓子 of 盛らる大皿  
一本の梅馥郁と香るらん

須田智恵

この道の深く遠しや初筑波  
御慶御慶と鳴くは何鳥  
ニューヨーク孫誕生の便りきて

篠原達子

初鶏や上海ねむる闇の底  
春着に着替へ走る自転車  
梨の花少年姉にはにかみて

高橋豊美

移り来て何やらゆかし初景色  
淑気満ち満ち富士の高空  
春の卓「源心」の座を囲むらん

瀧川雅代

まゆ玉や人のころの照りかげり  
十六むさし歌留多雙六  
薄氷に仔犬ひたすらはしやぎゐて  
おぼろ月追ひまたはしご酒

中川キヌ

初伊勢や真珠筏に波やさし  
福餅さげて年賀挨拶  
どこまでも西追ひかける戌つれて

武村利子

初春や喜寿を迎へん老書生  
家族揃うて祝ふお雑煮  
おらが街とよあけの風光るらん

永坂博美

初晴や機影忽ち点となる  
ビッグバードに淑気満ちみつ  
花一枝こころ捧ぐの文添へて

橋本文子

屠蘇くむや生ける証しの祝箸  
赤姫眩し飾り羽子板  
沖繩の花ほころぶと便りきて

中田あかり

初東風の沖見据えつゝ船出せん  
屠蘇くみ合うて祈る豊漁  
雀籠に笹子も混り梅が枝に

土屋実郎

初景色富士江の島を右左  
波しづかなる歳旦の海  
花みづきそのかみの人惚ばれて

中島啓世

海原を弾み出でたる初日かな  
玻璃のギャルリに結ひし輪飾り  
花心童女のまゝに遊ぶらん

椿紀子

初日の出あびてのどかに眠る猫  
風さはやかに羽をつく子ら  
大金を拾った夢にうなされて

中島まさし

初日の出金波銀波を煌めかす  
二見の礁飾る注連縄  
客まうけ大吟醸を賜はりて

富田一青子

お正月塀の外より羽根の音  
淑気漂ふ床の水仙  
初午の祭の用意整ひて

成田玲子



肅肅と庵に届く初茜  
はこべらを摘み居すわる椋鳥  
春の海法華経唱ふ波ならん

根津美紗  
八角澄子

初景色能登の禄剛の波の花  
飾海老には添ふる橙  
遅き日を出世力士と酒酌みて

原田千町

シャンパンを抜きて御慶を交しけり  
初便りせむ旅の絵葉書  
臥竜梅天地の気に香るらん

福井隆秀

命得て七度びの干支めぐりきぬ  
矩を踏えずに屠蘇も小盃  
闘へと春の疾風の猛るらん

船渡文子

水底に小さき生命や初鶉川  
波間に下るす權淑氣満つ  
うららかに五言絶句をよみあげて

櫻岡素子  
星野石雀  
櫻岡素子

ほうらいの山まつりせむ老の春  
ふくら雀の遊ぶ福藁  
花淡き月夜鼓の緒を締めて

八代良子

初釜や多摩に住まひて十五年  
花びら餅をねだる老犬  
卒業子留学の夢きりもなし

山口瑞枝

ゐながらに愛づ初富士や三世代  
ワンと御慶を申すプードル  
小波の渚咲きはふ花ならん

山田歌子

若水やふくめば五体廻り  
三河万歳老いて鬢鏤  
百千鳥一日溪の明るくて

歳旦三つ物について

平成六年元旦に、私が頂戴した歳旦三つ物、それに、私が差上げたものも加えて六十四篇を御披露する。実を申せば、私も従来三つ物を作ってはいしたが、賀状に書いて差上げたのは今年が初めてである。自分で出して始めて分ったのであるが、歳旦三つ物の賀状ほど、その作者の全体を表現するものはない。これほど心の籠ったものはない。また、これほど簡便なものもない。

正月の挨拶をそのまま文学に作り上げた我々の先祖の叡智に感心しながら、来年からも生きていく限り、作り続けようと思った次第である。

\*「灰汁桶」の巻鑑賞は、紙面の都合で割愛しました。

読初や机直して去来抄  
串柿をそへ飾る御鏡  
狗嬉嬉と野は春光の溢るらん

細川研三  
佛淵健悟

元日や猫も聞きゐる誓ひ初め  
屠蘇いただいて向かふ大空  
雪解風米は良かれと吹くならん

町田順風

東雲の空紫に初詣  
若水満たす雅びなる玻璃  
音色よき鶯笛を吹き合ひて

峯田政志

初春や漲り寄せる時の波  
加速度つけて躍る追羽子  
蓬籠大地がちりと踏みしめて

村田富美

唐墨の香りふくいく初硯  
五形蘿蔔七草の籠  
きらめくは針魚の群の波ならん

本屋良子

雲海の波たゆたひて初茜  
新春を祝ぎあげる乾杯  
三代の記念撮影うららかに

吉池保男

初鶏に耳傾けり犬張子  
凧のうなりを運ぶ川風  
春野行く旅人の背に日の射して

吉村恵美子

吉野が里村長祈る国の春  
淑気あふれし妻のえみ顔  
凧日和波打ち際を犬つれて

若尾よしえ

霜登淑気みなぎる観音堂  
句碑に御慶の藜杖を曳く  
船起し小鯛の酢漬け銘々に

◎「季刊連句」に左の方々より、御芳志をいただきました。有難くお礼申し上げます。

- 一金 三万円 連句教室様
- 一金 三万円 柏連句会様
- 一金 一万円 ころも連句会様
- 一金 五千元 桃雅会様
- 一金 二万円 根津美紗様
- 一金 三万円 綾の会様
- 一金 五万円 猫蓑の会様
- 一金 二万円 源心庵の会様

第四十八回 猫 衰 会

歌仙八卷 参加者五十三名

平成六年一月十九日  
於 江東芭蕉記念館

傘 齡 や

東 明 雅 捌

傘齡や新年古き酒五升  
初占に出でし幸先  
佇めばま白き蝶の舞ひ立ちて  
風合戦の父と子の夕  
龍月鉄橋を行く貨車長き  
モーツァルトの曲に和める  
タイ料理「トムヤムクン」に時間かけ  
心ひかるる母に似しひと  
襟留めにきらりと光り黒真珠  
短夜のはや明けそむるなり  
誘はれて葵祭りの人混みに  
箱師修行の新人りの弟子  
尾がすこし見えてゐるなり穴惑ひ  
分水嶺にかかる満月  
そぞろ寒平仄脚韻ままならず  
やや濃くしたる珈琲をのむ  
洗礼のごとし落花を受くる群  
グラバー邸にもゆる陽炎

明 雅  
啓 世  
央 子  
守 英  
ますみ  
歌 子  
碧 子  
み 子  
世 子  
英 子  
歌 子  
央 子  
み 子  
レガッタに賭けたる遠き若き日よ  
声も出でざり不況解雇に  
突然に西海岸を襲ふ地震  
冬至の粥の卓にこぼるる  
茶懐石デルフト焼きの鉢つかひ  
騎馬民族の末の語部  
すりきれた箒を使ふおしらさま  
潜り戸の鍵そつと開けをく  
手術したあとも癒らぬ恋病ひ  
われからと泣くひとを見放す  
綾線の青きほのめき居待月  
ロカ岬にて秋惜しむなり  
長電話老いし親もつ同志にて  
仏法僧のしきりなる声  
天瓜粉湯上りの子のはねまはり  
キャンパス据ゑて画を描く午後  
京の奥常照皇寺は夢の花  
築にきらきら若鮎の群

英 央 碧 世 同 碧 央 歌 英 碧 み 世 英 碧 央 英

弾 初 め

内 田 麻 子 捌

弾初めのショパン・シューマン・ドビュッシー  
タフタの春着淡きとき色  
観覧車笑顔あふれて廻るらん  
鳩と雀が餌をついばむ  
夕月を映す川瀬の街はづれ  
真緒の薄手折りつつ行く  
秋場所を湧かせ小兵の力士達  
デート忽ちフォークスの種  
あの黒子さはってみたい今宵こそ  
五日並べが一寸詰って  
真砂町こんにやく閻魔賑はひぬ  
肌身離さぬ貯金通帳  
スチエワードジョッキ軽々窓に月  
デッキプールの渡るそよ風  
武器を売り石油を買って中東に  
これは重宝軒防止器  
現代の花咲命と気負ふ父  
何時の間にやらあしたばの殖え

麻 子  
瑞 枝  
文 子  
久 美子  
治 子  
光 子  
麻 子  
瑞 枝  
文 子  
久 美子  
治 子  
光 子  
磯伝ひ穴あちこちに望潮  
噂話のつづく海女たち  
兄弟チャンネル争ひじりーグ  
出無精の猫庭をうろつく  
抱かれ居る指ゆっくりとほどかれて  
夢に消えゆく雪女郎なり  
ポケットのホカロン三つ固くなる  
杜鎮まり献茶お点前  
京菓子の老舗興行どこまでも  
ヤングファッション破れジーパン  
傘の中明るさありて月にじむ  
もやへる舟に小鯛を焼く  
漫画年齢だんだん上る西鶴忌  
昔闘士も白髪まじりに  
ずっしりとカードが重い吾が財布  
護謄風船の束を飛ばして  
花吹雪友とはるけき旅に浴ぶ  
羽を休める蝶は紫

文 瑞 光 凡 久 光 治 同 文 久 瑞 文 麻 治

